

# 日本英文学会九州支部 第 65 回大会

期日 2012 年（平成 24 年）  
10 月 27 日（土）・28 日（日）

場所 九州産業大学（国際文化学部）

## 日本英文学会九州支部

〒 819-0395 福岡市西区元岡 744 番地  
九州大学大学院言語文化研究院

太田一昭研究室内

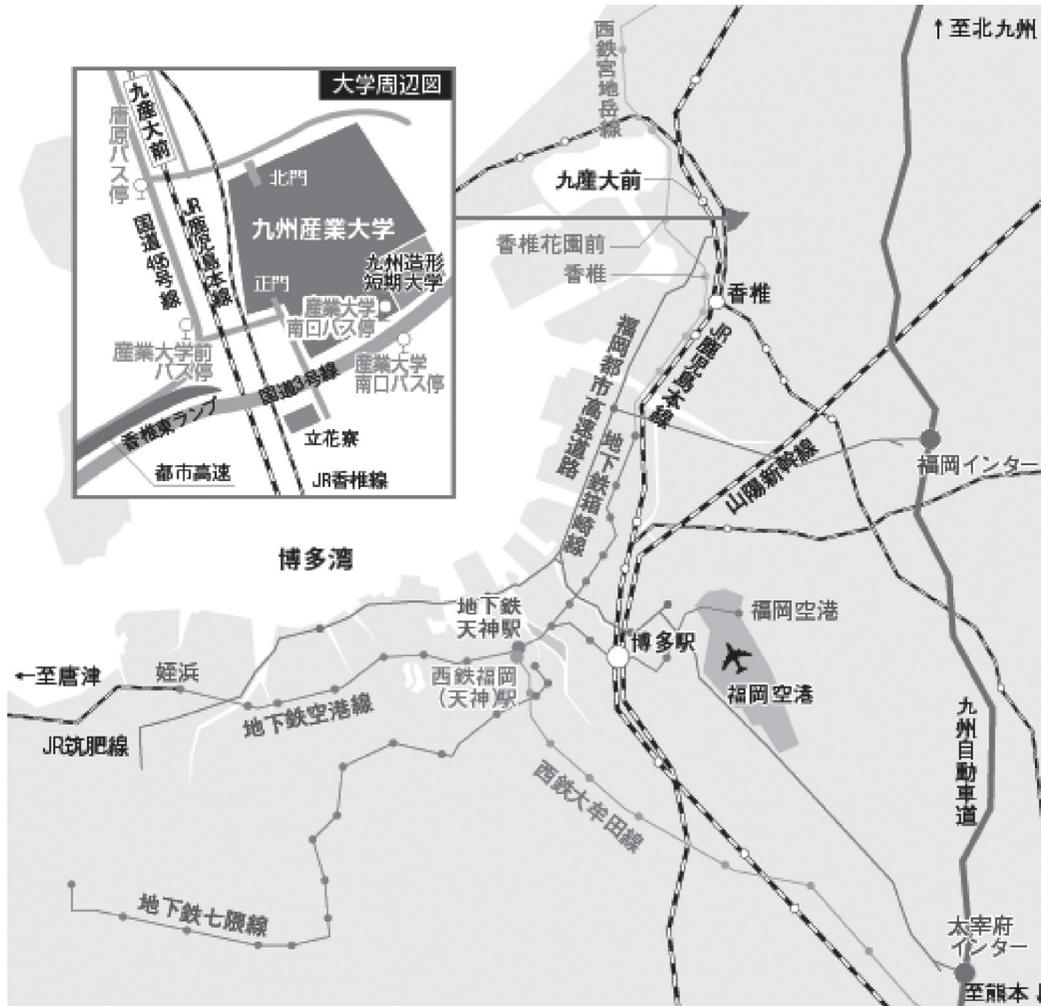
TEL/FAX 092-802-5726

E-mail: [k-jimukyoku@mx5.canvas.ne.jp](mailto:k-jimukyoku@mx5.canvas.ne.jp)

HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

# 九州産業大学アクセスマップ

〒 813-8503 福岡市東区松香台 2-3-1 TEL 092-673-5050 (代表)



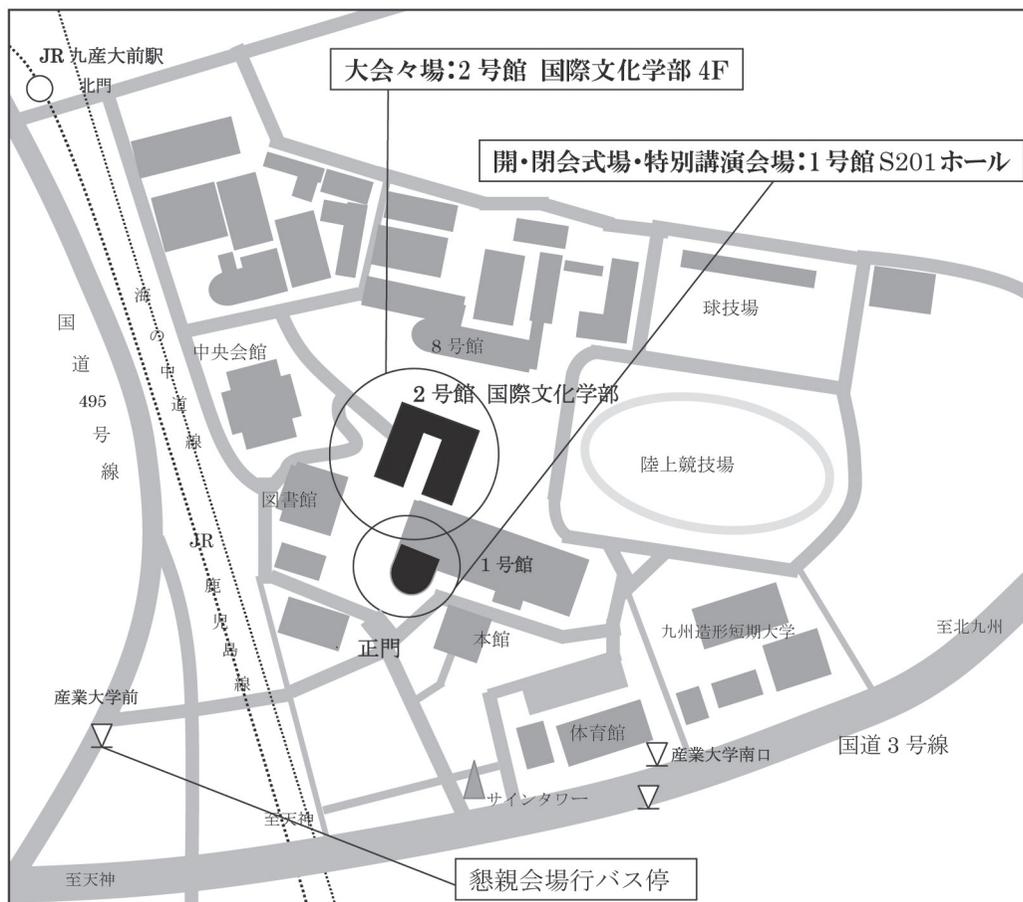
## JR 鹿児島本線

- ・博多駅から上り普通電車で約 15 分、「九産大前」駅下車／徒歩約 1 分
- ・小倉駅から下り普通電車で約 60 分、「九産大前」駅下車／徒歩約 1 分
- ・特急・快速利用の場合は「香椎駅」で普通電車に乗り換え、「九産大前」駅下車／徒歩約 1 分

## 西鉄バス

- ・天神バスセンター（1 番のりば）から都市高速経由で約 20 分
- ・天神中央郵便局前から（18 A のりば）から都市高速経由で約 15 分
- ・「産業大学南口」下車／徒歩約 2 分

## 九州産業大学キャンパス



### 懇親会場

福岡リーセントホテル 2F  
(TEL:092-641-7741)

「産業大学前」発バス時刻表 (16時～19時)

行先	天神	天神	大濠公園
行先番号	21	23	23
16	16	23 53	03 33 43
17	16	24 53	03 33 43
18	17		03 23 36 51
19	17	06	26 44

### アクセス

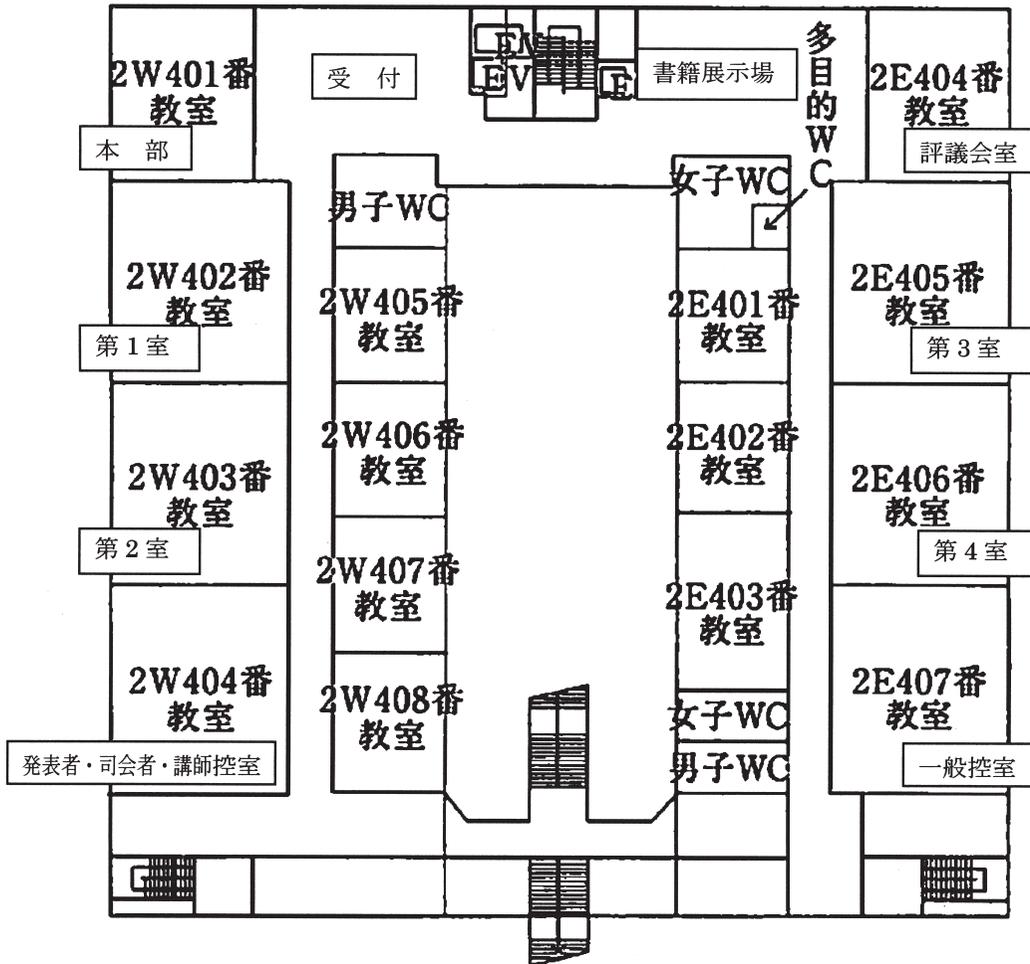
西鉄バス「産業大学前」バス停  
(上記地図参照)にて「天神」  
または「大濠公園」行きに乗車、  
「箱崎浜」下車、徒歩1分。

### 学内食堂のご案内 (土曜日のみ利用可)

- \*午後2時まで: ○中央会館学生食堂 ○イタリアンレストラン「クオーレ」(図書館1階奥)
- カフェテリア(1号館1階) ○オープンカフェ(ベーカーリー)「たちばな」(北門すぐ)
- \*午後3時まで: ○クラブハウス(8号館1階:2号館の向かい棟)

# 2号館国際文化学部 4F 平面図

4F



# 会場案内

## 九州産業大学国際文化学部 2号館 4階

(〒 813-8503 福岡市東区松香台 2-3-1)

10月27日(土)

開会式(13時)

(1号館 S201 ホール)

研究発表(① 13時30分 ② 14時10分)

第1室(イギリス文学)

2W402 番教室

第2室(アメリカ文学)

2W403 番教室

第3室(英語学)

2E405 番教室

第4室(英語学)

2E406 番教室

シンポジウム(15時~17時20分)

第1部門(イギリス文学)

2W402 番教室

第2部門(アメリカ文学)

2E405 番教室

第3部門(英語学)

2E406 番教室

懇親会(18時30分~20時30分) 会費 5,000円(学生 3,000円)

\*会場へのアクセスについては前掲のキャンパスマップをご覧ください 於 福岡リーセントホテル 2F

10月28日(日)

研究発表(① 9時20分 ② 10時 ③ 10時40分 ④ 11時20分 ⑤ 12時)

第1室(イギリス文学)

2W402 番教室

第2室(イギリス文学)

2W403 番教室

第3室(アメリカ文学)

2E405 番教室

第4室(英語学)

2E406 番教室

特別講演(13時30分)

1号館 S201 ホール

閉会式(15時)

1号館 S201 ホール

受付

4F エレベーター横オープンスペース(正午より)

\*受付では年会費の納入はできません

研究発表者・司会・シンポジウム講師控室

2W404 番教室

一般会員控室

2E407 番教室

書籍展示場

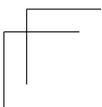
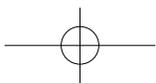
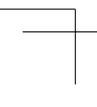
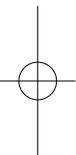
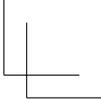
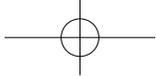
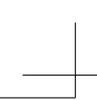
4F エレベーター横オープンスペース

評議会室

2E404 番教室

大会本部

2W401 番教室



# 日本英文学会九州支部第65回大会プログラム

時：2012年10月27日（土）・28日（日）

所：九州産業大学 国際文化学部

## 第1日 10月27日（土）

開会式 13時より（1号館 S201 ホール）	司会 九州大学教授	吉村 治郎
開式の辞	支部長・九州大学教授	太田 一昭
挨拶	九州産業大学 国際文化学部長・国際文化研究科長	和田 勉
事務局報告	事務局長・九州大学教授	松村 瑞子
優秀論文賞選考報告・授与式	編集委員長・熊本県立大学教授	村里 好俊

## 研究発表（① 13時30分 ② 14時10分）

第1室（2W402 番教室）	司会 福岡大学教授	山内 正一
1. バレット・ブラウニング『オーロラ・リー』のホメロス問題	九州大学大学院博士後期課程	浜本 裕美
<hr/>		
	司会 山口大学教授	宮原 一成
2. <i>An Artist of the Floating World</i> の社会的背景	九州大学大学院博士後期課程	阿部 卓郎
<hr/>		
第2室（2W403 番教室）	司会 佐賀大学教授	早瀬 博範
1. 脅威にさらされたアイデンティティ——『響きと怒り』におけるクウェンティンのジェンダーとセクシュアリティの揺らぎ——	九州大学大学院修士課程	吉村 幸
2. 「儀式化」された狩り—— <i>Go Down, Moses</i> における主人／奴隷——	西南学院大学非常勤講師	銅堂 恵美子
<hr/>		
第3室（2E405 番教室）	司会 福岡工業大学教授	宗正 佳啓
1. 弱フェーズに関する考察——素性継承の拡張	九州大学大学院博士後期課程	大塚 知昇
<hr/>		
第4室（2E406 番教室）	司会 西南学院大学教授	藤本 滋之
1. 使役構文研究——態の観点から——	九州大学大学院修士課程	萱嶋 崇
2. Copular 文とその移動規制に関する統語的分析	九州大学大学院修士課程	水上 拓郎

## シンポジウム (15時～17時20分)

## 第1部門「イギリス文学」(2W402 番教室)

過去を再構築する試み——新世紀の英語小説と歴史——

司会・講師	水産大学校准教授	高本孝子
講師	山口大学教授	池園宏
講師	西南学院大学教授	加藤洋介
講師	熊本県立大学准教授	水尾文子

## 第2部門「アメリカ文学」(2E405 番教室)

トニ・モリスンが描くアメリカ——植民地時代から公民権運動まで——

司会・講師	西南学院大学教授	宮本敬子
講師	東京理科大学准教授	深瀬有希子
講師	鹿児島大学非常勤講師	小林朋子
講師	愛知県立大学教授	鵜殿えりか

## 第3部門「英語学」(2E406 番教室)

従属節における主節現象——埋め込み構造のメカニズム——

司会・講師	長崎大学教授	廣江顕
講師	福岡大学教授	古賀恵介
講師	宮崎大学准教授	小熊猛
講師	福岡大学講師	西村恵

懇親会 (18時30分～20時30分) 会費 5,000円 (学生 3,000円) 於 福岡リーセントホテル 2F

\*会場までのアクセスについては前掲のキャンパスマップをご覧ください

## 第2日 10月28日(日)

## 研究発表 (①9時20分②10時③10時40分④11時20分⑤12時)

## 第1室 (2W402 番教室)

司会 鹿児島大学教授 大和高行

1. Prospero による魔術のアナモルフォーズ——幻覚から現実へ——

西南学院大学大学院研究生 雨森未来

司会 福岡教育大学教授 後藤美映

2. 『プロメテウスの解縛』における科学的認識——ヴェールを取られた「目」の革命——

北九州市立大学大学院博士前期課程 常数晃大

3. ロマン派とイギリス啓蒙思想——ジョン・キーツを中心に——

西南学院大学大学院博士後期課程 井浦葉子

司会 九州大学准教授 鵜飼信光

4. メディアとしての *David Copperfield*——移動と同時存在性をめぐって——

北九州市立大学大学院博士前期課程 原田昂

5. 第二のキリストとしてのテス——愛のパラドックス、贈与と殉教——

北九州市立大学大学院博士後期課程 今川京子

- 第2室 (2W403 番教室) 司会 北九州市立大学教授 木下善貞
1. *The Voyage Out* における旅の意味の二重性  
九州大学大学院博士後期課程 大谷英理果
  2. トールキンの『サー・ガウェインと緑の騎士』に読みとるファンタジー  
九州大学大学院博士後期課程 島居佳江
- 
- 司会 九州大学教授 谷口秀子
3. queer な感覚とアイデンティティの揺らぎ——ルイス・キャロルの現実——  
北九州市立大学大学院博士前期課程 堀秀暢
  4. 狼に変身する赤ずきん——Tanith Lee の“Wolfland”における女性像——  
福岡工業大学助教 原田寛子
- 
- 第3室 (2E405 番教室) 司会 鹿児島大学教授 竹内勝徳
1. 『書記バトルビー』における語り手の苦悩——語りへのアプローチ——  
九州大学大学院修士課程 宮地悠
- 
- 司会 福岡大学教授 大島由起子
2. 内なる荒野へ——*A Mercy* における自由への旅路——  
九州大学大学院博士後期課程 吉田希依
- 
- 司会 北九州市立大学非常勤講師 大塚由美子
3. マーガレット・アトウッド『またの名をグレイス』  
——犠牲者の立場を乗り越えていく希望を掲げる——  
長崎大学准教授 松田雅子
- 
- 第4室 (2E406 番教室) 司会 久留米大学教授 河内千栄子
1. シャドーイングに見る日本語話者の英語発音考察  
福岡女学院大学講師 城戸真由美
- 
- 司会 福岡工業大学教授 古川武史
2. 英語条件節からの抜き取りに関する統語分析  
九州大学大学院修士課程 吉村理一
  3. 遊離数量詞について  
九州大学大学院修士課程 溝江恵美子
- 
- 特別講演 13時30分より (1号館 S201 ホール) 司会 九州大学教授 西岡宣明  
学習院大学文学部教授 高見健一  
英語の場所句倒置構文と There 構文
- 閉会式 15時より (1号館 S201 ホール)  
挨拶 九州産業大学教授 河野賢司

〈第1日〉10月27日(土)

## 研究発表

第1室(2W402番教室)

司会 福岡大学教授 山内正一

## 1. バレット・ブラウニング『オーロラ・リー』のホメロス問題

九州大学大学院博士後期課程 浜本裕美

ヴィクトリア朝において、ホメロスの叙事詩が聖書に比せられる権威を持っていた一方、ホメロスの実在性や創造性が疑問視され始めていた。本発表では、そうした批評的背景に着目し、オーロラが同時代を題材にする叙事詩を支持する箇所を再検討する。主な検討箇所は5.139-54, 1246-57である。

オーロラは、目指すべき叙事詩人の先例としてホメロスを持ち出す際に、ウォルフ F. A. Wolf、ナイト Richard Payne Knight という二人の学者を批判する。ウォルフは、*Prolegomena to Homer* (1795) において、ホメロスの実在を否定し、「ホメロス問題」を広く認識させた人物である。またナイトは、性的な神話解釈や、ホメロスの詩の極端な校訂で知られていた。これまであまり注目されてこなかった、これらの二人に対する批判の検討を通じて、当時の批評的論争点の一つであった「ホメロス問題」が、オーロラの叙事詩についての主張に重要な役割を担うことを明らかにする。

司会 山口大学教授 宮原一成

2. *An Artist of the Floating World* の社会的背景

九州大学大学院博士後期課程 阿部卓郎

カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) は、長編第二作目である *An Artist of the Floating World* (1986) において、ブッカー賞の候補作品の一つに挙げられて、結局、ブッカー賞に次ぐと言われるウィットブレッド・ブック賞を受けている。この作品は、1948年10月から1950年の6月までの日本のどこか分からない一都市を舞台として、主人公のオノ (Ono) とその家族を描いた物語である。

本発表では、主に以下の5点を明らかにすることによって、作品の社会的背景を明らかにしたい。つまり、イシグロは(1)何故、登場人物や構造物に、例えば「ためらい橋」のような奇妙な名前をつけたのであろうか。(2)何故、例えば「みぎひだり」(Migi-Hidari) のような奇妙な店の名前を登場させているのであろうか。(3)何故、「フルカワ」の名前を登場させたのであろうか。(4)何故、作品の時代背景を第二次世界大戦直後に設定したのであろうか。(5)本作品は、戦後間もない1948年から1950年を舞台として描かれている。イシグロは何故、この時期を背景に本作品を描いたのであろうか。以上の5点を明らかにすることによって、この作品においてイシグロが主張したかった事柄が見えてくると思われる。

## 第 2 室 (2W403 番教室)

司会 佐賀大学教授 早瀬博範

## 1. 脅威にさらされたアイデンティティ

——『響きと怒り』におけるクウェンティンのジェンダーとセクシュアリティの揺らぎ——

九州大学大学院修士課程 吉村幸

本発表はウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の『響きと怒り』 (*The Sound and the Fury*) における登場人物の一人、クウェンティン・コンプソン (Quentin Compson) のアイデンティティの揺らぎについて考察する。コンプソン家の長男であるクウェンティンには、妹のキャディ (Caddy) や弟のジェイソン (Jason) と比べてあまり強烈な性格が現れていない。この性格は三つの側面においてそれぞれクウェンティンのアイデンティティの曖昧さを表している。まずジェイソンとの比較により、彼の存在は実体のない希薄なものであることが露呈される。さらにコンプソン家の三男であるベンジャミンの倒錯した語りは、クウェンティンのジェンダーの曖昧さを明確にする。そしてクウェンティンの語りは、彼自身の同性愛的な性癖を明らかにし、彼のセクシュアリティにも曖昧性が見られる。これら三重の曖昧なアイデンティティを抱えたクウェンティンは結果的に自殺することになる。このクウェンティンに対する脅威が、『響きと怒り』全体を貫く問題を象徴することになるのである。

2. 「儀式化」された狩り——*Go Down, Moses* における主人／奴隷——

西南学院大学非常勤講師 銅堂恵美子

Eric Sundquis は game, ritual, pursue のテーマが *Go Down, Moses* には広がっており、それらが hunter と beast、そして white と black の関係を明示する、と述べる。確かに Olga Vickery が述べたように物語の枠になっているのは “ritual hunt” であり、この作品では黒人奴隷、動物、女性などが “hunt” される様子が描かれている。しかしそれが「儀式的」なものである、とは一体どういうことであろうか。本発表では、儀式化された狩りに注目することにより白人主人と黒人奴隷の依存関係を明らかにしてゆきたい。

“Was” では、黒人奴隷 Tomey’s Turl の脱走が毎年恒例の “ritual” として描かれる。この「儀式化」された脱走劇は、白人が黒人を追うという構造を「儀式化」することにより、崩壊しつつある白人と黒人の関係を以前のように維持しようとするものであると考えられる。また Thadious Davis は Tomey を “a figure of transgression and hybridity” と呼び、彼の行動が「白人」と「黒人」の関係を揺るがし、またその境界線を越える存在であると主張する。今回の発表では、Tomey’s Turl や “Delta Autumn” に登場するロスの名無しの愛人に注目し、hunting と hunted の関係がいかに変質し、流動化しているかについて検討し、それに反映される白人／黒人の関係について考察していきたい。

## 第 3 室 (2E405 番教室)

司会 福岡工業大学教授 宗 正 佳 啓

## 1. 弱フェーズに関する考察——素性継承の拡張——

九州大学大学院博士後期課程 大 塚 知 昇

Chomsky (2008) では、強フェーズ主要部による素性継承 ((1)) と、強フェーズ主要部の端素性 (EF) とその補部が継承するアグリーメント素性 (AF) による同時的な移動 ((2)) が提案されている。



しかしながらこの枠組みでは、Legate (2003) で取り上げられた以下の例が問題となる。

- (3) a. [At which of the parties that he<sub>i</sub> invited Mary<sub>j</sub> to] was every man<sub>i</sub> ✓ introduced to her<sub>j</sub>\*?  
 b. \*[At which of the parties that he<sub>i</sub> invited Mary<sub>j</sub> to] was she<sub>i</sub>\* introduced to every man<sub>i</sub>\*?

(Legate2003)

上記の枠組みでは弱フェーズが EF を持つことは予測されず、(3a) の説明は問題となる。また、フランス語では受動態の動詞に屈折が現れることから、弱フェーズの vP に AF も存在すると考えられる。

- (4) Les chaises ont etc repaintes.  
 the chairs.fem.pl have.pl. been repainted.fem.pl  
 'The chairs were repainted.'

本発表では、素性継承を拡張し、強フェーズの素性がコピーされて弱フェーズに渡されると想定することで、上記の例を説明する。さらにこの想定と Richards (2010) における Distinctness Condition を組み合わせることにより、以下の (5) の対比を説明することも可能であることを示す。

- (5) a. Who did you give the book to t?                      b. \*John was given the book to.  
 c. Who did John talk to Harry about t?                    d. \*Fred was talked to Harry about.

## 第 4 室 (2E406 番教室)

司会 西南学院大学教授 藤 本 滋 之

## 1. 使役構文研究——態の観点から——

九州大学大学院修士課程 萱 嶋 崇

日本語において、受動態と使役構文はその形態について類似する。

- (1) 花子は太郎に見られた。  
 (2) 花子は太郎に踊らせた。

このことから本発表では日本語の受動文、使役文両構文について VoiceP において二格認可が

行われており、接辞 *-rare/-sase* は VoiceP 主要部であると想定する。この想定により、受動文と使役文が統一的に扱われ、受動態に対応して使役態という語が用いられる。更に VoiceP 投射の想定を英語にも拡張し、英語と日本語の使役構文における特殊な現象を分析する。

- (3) \*Mary was hadto) dance.
- (4) 花子は太郎 (に／を) 踊らせた。

英語では *have* を用いた使役文は受動化できない。また日本語では二格使役とヲ格使役の間で、被使役者の意志性について解釈の違いが生まれる。この他様々な現象が、VoiceP 投射を想定した分析によって説明される。

## 2. Copular 文とその移動規制に関する統語的分析

九州大学大学院修士課程 水上 拓郎

今回の発表においては、CopularBE、特に Specificational と Equative の Copular 文の移動規制に関する現象を統語的に説明することを試みる。英語における Specificational の Copular BE の文はその主語・述部のいずれから移動することが可能であるが、倒置するとこれが不可能となる。さらにこの倒置した Copular 文と同様の移動規制が Equative Copular Sentence において生じる。

- (1) Brian's arrest was the biggest upset.
- (2) a. Whose arrest, do you think  $t_i$  was the biggest upset?  
b. How biggest upset, do you think Brian's arrest was  $t_i$ ?
- (3) The biggest upset was Brian's arrest.
- (4) a. \*Whose arrest, do you think the biggest upset was  $t_i$ ?  
b. \*How biggest upset, do you think  $t_i$  was Brian's arrest?
- (5) Your opinion of Edinburgh is my opinion of Philadelphia.
- (6) a. \*Which city, is your opinion of  $t_i$  my opinion of Philadelphia?  
b. \*Which city, is your opinion of Edinburgh my opinion of  $t_i$ ?

このように、他の倒置構文とは異なる特徴を倒置 Copular 文は持ち、さらにその特性は Equative と酷似する。本発表では、Equative と倒置 Copular 文は同じ構造であるとし、この倒置 Copular 文がどのような構造であるかを明らかにするために、Predicate 構造と Rizzi (1997) の階層構造を支持し、FOCUS やそれによって起こる FOCUS Freezing などによって移動規制を説明することを試みる。

## シンポジウム

## 第1部門「イギリス文学」(2W402 番教室)

## 過去を再構築する試み——新世紀の英語小説と歴史——

司会・講師	水産大学校准教授	高本孝子
講師	山口大学教授	池園宏
講師	西南学院大学教授	加藤洋介
講師	熊本県立大学准教授	水尾文子

21世紀に入って10年余り過ぎた現在、英語小説の動向を、たとえばブッカー賞関連の作品群について見てみると、過去の時代に対する関心がとみに高まってきているように思われる。理由はさまざまだろうが、何よりも、先行きの不透明感が増す一方の世界的な状況にあって、未来を切り開くための手がかりを求める人々が過去の時代にそれを求めようとするのは必然の成り行きだろう。また、小説創作の現場において、物語行為を前景化した作品群が一通り出揃ったところで、ポストモダン小説の新たな可能性を模索する動きが出てきていることも一因として考えられる。さらに、ポストコロニアル作家たちによって旧植民地時代を舞台とした小説が次々に生み出されている状況もある。

これらの小説にほぼ共通して言えることは、個人的なものにせよ、集団のものにせよ、過去は語り直されることによって新たに構築されていくものであるという意識が小説全体を貫いていることである。そして、その構築の仕方に各々の作家の個性が発揮されているように思われる。よって、本シンポジウムにおいては、2000年以降発表のイギリスおよびアイルランド小説の中からブッカー賞関連の有力作家4人の作品を取り上げ、「過去の再構築」という観点から分析を加える予定である。

Kazuo Ishiguro, *When We Were Orphans* における過去の再構築の意味

山口大学教授 池園 宏

Kazuo Ishiguro はほぼ全ての長編小説において過去を扱う。彼が用いる歴史的過去は、「一つの価値体系が別の価値体系に取って代わられる過渡期」(Barry Lewis)、とりわけ二つの世界大戦やその前後の時代であることが多い。2000年出版の *When We Were Orphans* で Ishiguro が関心を寄せるのは、世界的緊張が高まりつつあった1930年代の上海である。作品は探偵小説の体裁をとっているが、これは1920～30年代に流行した探偵小説群への作者の関心を反映したもので、上記時代と符合する。主人公兼語り手の探偵 Christopher Banks は、記憶のフィルターを通して、さらなる過去である自己の子供時代を回想する。探偵は過去に起きた事件の真相を解明するという意味で、彼は文字通り過去を再構築する役割を担う。しかし、Ishiguro 作品の常として、この語り手による過去の探求は一筋縄ではいかない。本発表では、Christopher を通して浮かび上がる作者の過去観やその提示法について、1930年代の歴史的状況や Ishiguro の他作品との関連性を踏まえつつ考察してみたい。

## John Banville のイデオロクトとその実践

西南学院大学教授 加藤 洋介

John Banville は、〈都市と作家シリーズ〉の一冊として 2003 年に *Prague Pictures: Portraits of a City* を刊行したが、その冒頭の一文で「これはガイドブックでなく、ガイドブックを意図して書かれたものでもない」と語っている。むしろこの本が採用する方法と言語は、ガイドブックのそれとは意識的に区別されるものである。これを出発点として、ガイドブックに象徴される同時代の文化に対して Banville 自身が差異化する彼の言語実践を分析し、その特殊な言語をイデオロクトとしてとらえる。これは個人の記憶と経験を記録する言語であり、その分析から、彼の文学における言語と記憶の関係、過去の再構築の方法を明らかにする。そして、この言語が Banville の小説、たとえば 2005 年にブッカー賞を受賞した *The Sea* のような小説でも実践されていることを示し、この視点が Banville の文学の理解に有効であることを論じる。最終的に、Banville のイデオロクトの実践と同時代の文化の関係に論及し、報告をまとめる。

### 1940 年代から歴史を描く——Sarah Waters, *The Little Stranger* における過去の再構築——

熊本県立大学准教授 水尾 文子

ヴィクトリア朝を舞台にした小説は、過去数十年にわたり、イギリス作家たちが取り上げる主流テーマの 1 つとなっている。その代表的な作家と言えるのがブッカー賞最終候補の常連 Sarah Waters である。処女作 *Tipping the Velvet* (1998) を皮切りに 3 作品続けてヴィクトリア朝を舞台にした作品を書いているからだが、*The Night Watch* (2006) 以降、Waters は、作品の設定を 1940 年代に移している。2009 年に出版された *The Little Stranger* は、20 世紀前半まで隆盛を極めながらも没落してゆく終戦直後の領主館を舞台にした作品である。1940 年代後半という時代設定であるものの、物語の鍵になるのは、ヴィクトリア朝時代の領主館の面影と屋敷で起こる心霊現象というヴィクトリア朝の要素である。本発表では、労働党政権の台頭に後押しされた政治・社会的転換期の 1940 年代を舞台にした *The Little Stranger* において、Waters がどのように過去を再構築しているのかを考察したい。

### Tom McCarthy, *C* における二重の過去の構築

水産大学校准教授 高本 孝子

新進気鋭のイギリス作家 Tom McCarthy (1969) の最新作 *C* (2010) は、おおかたの予想とは裏腹に、惜しくもブッカー賞を逃してしまった。だが、その斬新さと構成の緻密さは特筆に値するものであり、今後のイギリス小説の動向を占う上で重要な位置を占めることは疑いない。

この小説が言わんとしていることを端的に言うなら、「すべてはつながっている」ということだろう。McCarthy は、すべての存在物、すべての時空間がつながっているということ、さまざまなモチーフを駆使して描き出しているのだ。たとえば、この小説の主な舞台は第一次世界大戦前後のイギリスであるが、その時空間がその他の時代・場所、特に古代のエジプトとつながっていることが、プロットの進展に伴い明らかにされる。そして、その過程において、現代も含めたあらゆる時空間同士のつながりが暗示されるのである。よって本発表においては、作者がどのように過去を再構築することによって時空間のつながりを浮かびあがらせているのかという点に注目して *C* を分析する。

## 第2部門「アメリカ文学」(2E405 番教室)

## トニ・モリスンが描くアメリカ——植民地時代から公民権運動まで——

司会・講師	西南学院大学教授	宮本敬子
講師	東京理科大学准教授	深瀬有希子
講師	鹿児島大学非常勤講師	小林朋子
講師	愛知県立大学教授	鶴殿えりか

トニ・モリスンは *Beloved* (1987)、*Jazz* (1992)、*Paradise* (1998) のいわゆる歴史三部作によって、奴隷制度時代から解放後 100 年あまりにわたるアフリカン・アメリカンの歴史を再構築したが、その試みは三部作以降も現在に至るまで続いている。2008 年の *A Mercy* では、アメリカ史をはるかに遡り植民地時代を、そして 2012 年に発表された最新作 *Home* では朝鮮戦争退役軍人の登場する冷戦時代を描いている。しかしながらモリスンは、単にアフリカン・アメリカンの視点からのみ、従来のアメリカ史に異議をとなえてきたのではない。彼女の文学世界にみられるアメリカ批判や歴史再構築は、アメリカという国家、歴史、文学などの概念を成り立たせている枠組みそのものをもゆるがしているように思われる。本シンポジウムでは、これまでモリスンが描いてきたアメリカを通史的に見渡してみることによって浮かび上がってくる、共同体、言語、移住、市民権などのテーマが、グローバル化の加速する世界のきわめて 21 世紀的な問題であることを明らかにしてみたい。

*A Mercy* にみる「想像の共同体」——植民地文学と「他者」表象——

東京理科大学准教授 深瀬有希子

バラク・オバマ政権の誕生とほぼ同時に出版されたトニ・モリスンによる第9作目の小説『マーシイ』(2008)は、17世紀後半の植民地時代を舞台に、出自の異なる者たちが「想像の共同体」を求め作ろうとする様子を描いている。本小説はノーベル文学賞受賞作品『ピラヴィド』(1987)の姉妹編とみなされているが、『ピラヴィド』が“post-modern slave narrative”と呼ばれるのならば、本小説にはどのような名づけが可能だろうか。思い起こせばいまから2年前、パリで開催されたトニ・モリスン学会でのあるセッションにて、ひとりのアメリカ人研究者は『マーシイ』を“post 9.11 novel”と呼んだ。このように「ポスト」という冠がたびたび付されるのは、作家自らがアメリカ文学伝統の再構築を試みていることを明らかにしているためでもある。モリスンによるアメリカ文学「キャンオン」再読の姿勢は、1980年代後半より顕著になり、『白さと想像力』(1992)として纏まったのち、20年以上の歳月を経ていまなお続いている。『ピラヴィド』が奴隷制廃止運動のプロパガンダとして白人編集者のもとで出版された「奴隷体験記」をふまえているのであれば、『マーシイ』が語り直す「物語」とはいかなるものなのか。本発表では、自然、宗教、「他者」表象に注目し、伝統的「白人」植民地文学の改変としての『マーシイ』を考察する。

近代的主体を超えて存在する——*Beloved*における言語とアイデンティティ——

鹿児島大学非常勤講師 小林朋子

ヨーロッパという限られた地域に住む白人の価値観を基盤として構成され、例えば、黒であることが、不在、否定、さらには悪を表象する英語という言葉を使って「黒い私」をどのように表

現するか。多民族国家のマイノリティとしてアフリカ系アメリカ人は常にこの問題と向き合っている。

『ピラヴィド』(1987)は、元来私のものではない「他者の言葉」で自己を理解するという人間存在の根源的なジレンマである状態を、奴隷制に由来する死の「現前」を描くことによって、ドラスティックに映し出している。

本発表では、『ピラヴィド』で描かれた周縁文化における主要な概念の一つである名称付与の問題をはじめ、白人性、男性性、合理性の対概念として現れる黒人のアイコンから絶えずはみ出していくこの作品の登場人物を考察することで、思考や認識だけでなく、身体感覚によって営まれる作家の言語活動に包括的に迫ってみたい。

### 「レシタティーフ」にみるスクール・インテグレーションの時代

愛知県立大学教授 鶴 殿 えりか

トニ・モリスンの“Recitatif” (1983)は、作家が発表した唯一の短編小説という特権的なテキストである。それにふさわしく、この短編にはモリスンのテキスト全体に通底するテーマ群が凝縮されている。その一つ、アメリカ合衆国の正史にアフリカ系アメリカ人がどのように関わってきたかを逆照射する、というテーマにここでは着目してみたい。

「レシタティーフ」では、公民権運動の時代を背景として、児童保護施設で出会った二人の少女——一方が黒人、一方が白人——の友情が、1940年代から1970年代にわたってどのような変遷をたどるかが描かれている。相手を愛しく思う気持は、何らかの事情が加圧されるだけで憎悪へと容易に変容する。親に捨てられたという共通のトラウマを抱えるトワイラとロバータは、肌の色の違いはあっても施設での困難な状況を力を合わせて乗り切ったが、長じるにつれ相手に対する反感を募らせることになる。それが頂点に達するのがスクール・インテグレーションの騒乱である。二人は白人側と黒人側に分かれて罵り合う。

時代のアイコンがふんだんに取り込まれたこの短編小説は、人と人との関係が時代や社会的状況と無関係ではありえないこと、そして、それによって生まれた敵対感情を「人種」の違いが増幅させることはあっても、決して対立の原因そのものではないことを、例証しようとしている。

### トニ・モリスンの描く「グレート・マイグレーション」

西南学院大学教授 宮 本 敬 子

Isabel Wilkerson の *The Warmth of Other Suns: The Epic Story of America's Great Migration* (2010) は、19世紀末から1970年にかけて南部から北部へと600万ものアフリカ系アメリカ人たちが動いた「大移住」が、現在のアメリカ社会・文化を形成した大事件であるにもかかわらず過小評価されてきたことを明らかにしている。ウィルカーソンはトニ・モリスンを「大移住の娘」として筆頭に挙げているが、15年の歳月をかけ、客観的資料と主観的視点を両立させた「ナラティブ・ノンフィクション」という手法を用いて執筆された本書は、モリスンの『ジャズ』や『パラダイス』を彷彿とさせる。また Nicholas Lemann の *The Promised Land: The Great Black Migration and How It Changed America* (1991) と比較されるように、先行研究に対する応答でもある。本発表では、公民権運動の前兆として、さらにはその後のグローバリゼーションへとつながる「大移住」の物語として『ジャズ』と『パラダイス』を再読し、モリスンが歴史記述をどのように書き換え、またその後の歴史記述にどのような影響を与えたのかを明らかにしたい。

### 第3部門「英語学」(2E406 番教室)

#### 従属節における主節現象——埋め込み構造のメカニズム——

司会・講師	長崎大学教授	廣江 顕
講師	福岡大学教授	古賀 恵介
講師	宮崎大学准教授	小熊 猛
講師	福岡大学講師	西村 恵

本シンポジウムでは、英語と日本語の従属節で観察される主節現象 (main clause phenomena: MCP) に対し、認知言語学と生成文法という相異なる立場から考察を加える。

MCP はこれまで日本語学 (三尾 (1942), 三上 (1972), 南 (1974, 1993), among others)、生成文法 (Emonds (1970), Haegeman (2007, 2009, 2010), Hooper and Thompson (1973)), また機能主義的類型論 (Givon (1980, 1990)) においても研究対象として俎上に上ってきた。本シンポジウムでは、過去の研究を踏まえ、MCP が観察される従属節にはどのような (文法的) 特性があるのか、どのようなメカニズムで MCP が生じているのか、等々について明らかにし、さらに、それぞれのアプローチ方法が事実をどのように捉え、またどのようなことを予測するのかに関して議論を深めたい。

#### 英語における挿入現象の意味構造——認知文法の立場から——

福岡大学教授 古賀 恵介

英語には、文内の種々の場所に、付加的な要素を入れ込む「挿入」(parentheticalization) と呼ばれる現象が存在する。(1)——(2) における、as it were や I think のようなものである。

- (1) He is, as it were, a walking dictionary.
- (2) She is, I think, the best person for the job.

挿入現象には、挿入要素の形態の面から見ると、単語・句・節にまたがる極めて多様なものが見られるのだが、本発表では、それらの意味構造のあり方を、Langacker の認知文法理論の枠組を援用しながら探ってみたいと思う。具体的には、挿入現象全体を「文構築過程の中断」という形で一般的に捉えた上で、その中に、意味構造の点から区別すべき以下の3つのタイプがあることを指摘する。

- (3) 命題内容中の付加部の配置変更
- (4) 文要素への補足的情報の追加
- (5) 文の主観性要素を修飾する要素の挿入

そして、そのそれぞれについて、認知文法理論ではどのように捉えることができるのかを示していく予定である。

## ガ・ノ交替の格助詞交替のメカニズム——反映する認知プロセスの相違——

宮崎大学准教授 小 熊 猛

日本語の連体節にみられるガ・ノ交替と呼ばれる格助詞交替のメカニズムに関して、文法的要素である格助詞は認知プロセスのみを反映するという観点に立ち、参照点モデルおよびトラジェクター・ランドマーク割り当ての概念を導入し、連体節内の主語名詞と被修飾語名詞の間の「XノY」で表される意味概念上の結束関係 (conceptual grouping) に基づいて意味が合成されると提案する。

「ノ」連体節は連体節内主語を参照点として、標的である被修飾名詞を同定する参照点関係をベースにした R/T 認知 (Reference-Point/Target 認知) を反映した連体修飾節構文であり、ここでの意味構造を下敷きに、認知像をパッケージで捉えて改めて際立ちの精査を行う tr/lm 認知 (trajector/landmark 認知) で捉え直されたものが「ガ」連体節であると主張し、提案する認知言語学的アプローチがガ・ノ交替の随意性および他動性制約が統一のかつ自然に捉えられることを示す。

## 英語の多重 wh 疑問文における wh-in-situ 句の埋め込み現象について

——Chomsky (2008) のフェイズ理論の観点から——

福岡大学講師 西 村 恵

英語の多重 wh 疑問文 (Multiple *Wh*-questions: MWhQ) では、(1) のような優位効果 (Superiority Effects) を示す。Bošković (2002) によると、文法的な (1a) は (2a) のペアリスト解釈のみが可能である。

- (1) a. Who bought what?  
b. \*What did who buy?
- (2) a. John bought the pen; Mary bought the eraser; Bob bought the notebook.  
b. John bought the pen.
- (3) に示すように、MWhQ の wh-in-situ 句は統語的な島の内部を含む埋め込み節内にも出現できる。これは、wh 句が島内から文頭位置に顕在的に移動できない (4) の事実とは対照的である。
- (3) a. Who likes books that criticize who?  
b. Who was happy after Mary fired who? (Stroik (2009: 67))
- (4) a. \*Who do you like books that criticize *t*?  
b. \*Who did you get jealous because I spoke *t*? (Fiengo et al. (1988: 81))

さらに、Dayal (2002) や Stroik (2009) では、(3) の場合は、(1a) で可能なペアリスト解釈が得られず、(2b) のようなシングルペア解釈のみが導出される可能性が指摘されている。以上に示す英語の MWhQ の統語現象は、従来のミニマリスト分析の枠組みで様々に説明されている (cf. Stroik (1996), Pesetsky (2000), Nishimura (2007))。本発表では、近年の派生的ミニマリスト分析である Chomsky (2008) のフェイズ理論 (Phase Theory) の枠組みのもとで、特に (3) の wh-in-situ 句の埋め込み現象を中心に、英語の MWhQ の文法的特徴が適切に説明されることを示す。

## 直接引用文の埋め込み

長崎大学教授 廣 江 顕

英語における直接引用文 (direct quote: DQ) は、以下 (1) で例示されているように分布する。

- (1) a. Mary said, "You're a genius."  
 b. John asked, "Is there anything I can help you with?"  
 c. "Is there anything I can help you with?" asked John./John asked.  
 d. "Is there anything," asked John, "I can help you with?"

Collins (1997) は、(1c) で観察される引用倒置 (Quotative Inversion) に焦点を当て、局所的経済性 (local economy) との関連で DQ の派生及び構造的位を特定する提案を行っている。

しかしながら、Collins の提唱する基本的仮説は、DQ に関するより広範な事実と照らし合わせて検証すれば、DQ の統語的振る舞いを十分に捉えているとは言い難い。そこで、本発表では、DQ が補部ではなく付加部を形成しているとの提案を行い、DQ の分布特性を捉える試みを行う。

〈第 2 日〉 10 月 28 日 (日)

## 研 究 発 表

第 1 室 (2W402 番教室)

司会 鹿児島大学教授 大 和 高 行

### 1. Prospero による魔術のアナモルフォーズ——幻覚から現実へ——

西南学院大学大学院研究生 雨 森 未 来

*The Tempest* の主人公 Prospero は、魔術を通して自分を失脚させた宿敵たちを成敗し、ミラノ公爵に復権してミラノへの帰還を達成する。Prospero のもちいる魔術には、視覚を通して知覚に訴えることで力を発揮する特徴がある。彼はさまざまな幻覚を見せることで敵たちを翻弄し、仮面劇を通して自分のメッセージを伝える。

本発表の目的は、Prospero が魔術として披露する幻覚に、人間の視覚と認識の相互関係を意図的に歪めるアナモルフォーズの特徴を読み取ることである。Prospero が現実を偽って創りだす幻覚は、他の登場人物たちの認識をかく乱し、錯覚を引き起こす。再び正常な認識を取り戻すためには、最終的に Prospero が示す視点を受け入れ、彼が誘導する現実を認めなければならない。魔術と科学が混ざり合う時代に隆盛したアナモルフォーズを考察し、人間の視覚と認識に作用し、劇的效果を生み出すアナモルフォーズの手法が Prospero の魔術に反映されていることを論じたい。

司会 福岡教育大学教授 後 藤 美 映

### 2. 『プロメテウスの解縛』における科学的認識——ヴェールを取られた「目」の革命——

北九州市立大学大学院博士前期課程 常 数 晃 大

P. B. シェリーによる『プロメテウスの解縛』を「死のヴェール」という言葉を鍵に、認識の革

命の意味を論ずる。人間は事物を眺める時、習慣という感覚的麻痺状態のためにその本質に気が付かない。存在それ自身に内包される感動に気づかない限り生を理解したとは言えず、世界は死にそれを観る人間もともに死んでいる。これが言わば「死のヴェール」をかけられ、本質の認識が妨げられている状態である。そのヴェールは世界を支配する専制的な力によって人間を支配するもの、ジョウブに象徴されるあらゆる暴力的な力であるが、本発表では認識を妨げる重要な要素として、『プロメテウスの解縛』に散見される科学的認識、特に生命進化に着目する。プロメテウスは、ヴェールに象徴されるあらゆる暴力的で専制的な力から人間を解放するものであるが、その革命は政治的、宗教的解放のみならず科学的な知の転換を要求している。

### 3. ロマン派とイギリス啓蒙思想——ジョン・キーツを中心に——

西南学院大学大学院博士後期課程 井浦葉子

イギリスロマン主義と啓蒙思想は対極にあるというのが一般的であるが、ロマン派は啓蒙思想を完全に否定していたわけではない。本発表は、ロマン派がイギリス啓蒙思想の流れを汲んでいるという視点から、ロマン派（特にジョン・キーツ）と啓蒙思想の共通点を明らかにすることを目的とする。

啓蒙主義は理性に基づく合理主義ともいえるが、その中で理性よりも感情や想像力を重視した哲学者がいる。それがデイヴィッド・ヒュームである。ヒュームの「想像力」とロマン派のコールリッジの「想像力」は「再-創造」という点で一致しており、それはキーツのオードの「再-創造」にも通じる。そこで「ナイチンゲールに寄せるオード」や「ギリシャの骨壺に寄せるオード」などの作品や書簡からキーツの啓蒙思想的、イギリス経験論的な面を検証し、ロマン派の「形成的精神」の源が啓蒙思想の経験主義的観念連合論であったことを明らかにしたい。

司会 九州大学准教授 鵜飼信光

### 4. メディアとしての *David Copperfield*——移動と同時存在性をめぐって——

北九州市立大学大学院博士前期課程 原田 昂

*David Copperfield* (1849) はその出版事情、すなわちメディアにより、読者を飽きさせないよう配慮がなされていることはよく知られる。しかしこの配慮として、作中最大のメディアでもある主人公Davidの移動が多用されることが関係していることについては議論の余地が残されている。本作は小説であるだけでなく、出版形式としては月刊分冊、市場では商品というように、多くのメディアを枠組みとしてもつ。作家が作品を書く前に、作品の枠組みが決定づけられるため、作家 Dickens (1812-1870) は決められた分量に対して過不足を発生させないことを要求される。McLuhan (1911-1980) はこれを「同時存在性」と呼ぶ。本発表では、Davidの移動と *Pilgrim's Progress* (1678) における主人公の移動を比較することで、この「同時存在性」を明らかにし、またDavidの移動を分析することで、メディアがDickensに制限を与えた事実と、同時に本作が小説および商品として成立するために利用すらされていたことを明らかにするものである。

### 5. 第二のキリストとしてのテス——愛のパラドックス、贈与と殉教——

北九州市立大学大学院博士後期課程 今川京子

Hardyは作品中、メタファーや枠組みとしてキリストの教えや聖書を用いた。これは、普遍宗

教としての始原的キリスト教への回帰を喚起する彼の心性の証しである。キリスト教が支配する硬直した社会の中、普遍宗教としてのキリスト教、制度化される前のキリスト教のメタファーを用いることで、現代における人間の〈聖性〉の復権、根源的宗教性の復活を示すことが、Hardyの意図であった。

本発表は *Tess of the D'Urbervilles: A Pure Woman* (1891) の Tess に注目する。副題に込めた Hardy の真意は、Tess という試金石を投じることで、目に見えないルールとして潜勢する社会の〈コード〉を顕在化させることにある。キリスト教の道徳が常識となり硬直状態に陥った社会で、次々と社会の〈コード〉を破ってみせる Tess のトリックスター性の中に、普遍的な愛の在り方を行為の実践で説いた律法の破壊者としての第二のキリストの表象を見る。併せて、キリスト教的精神と Tess の位置関係の中に俗性と聖性の対立を見出し、Hardy の設定した善悪の彼岸をイノセンスに転化することで、イノセンスを捉えなおすことを、本発表の目的とする。

## 第 2 室 (2W403 番教室)

司会 北九州市立大学教授 木下善貞

### 1. *The Voyage Out* における旅の意味の二重性

九州大学大学院博士後期課程 大谷英理果

ヴァージニア・ウルフの処女作である *The Voyage Out* (1915) は、世間から隔絶された環境で育てられたレイチェルが、南米に旅し、そこで出会ったイギリス青年のテレンスと婚約するも、熱病にかかり、イギリスに帰ることなく、旅行地で病死する物語である。表層的には、イギリス人による南米へのホリデー、または旅行を描きながら、レイチェルにとっては、現実世界から死の世界への旅となっている。本発表では、近代的な文化としての観光旅行と、異世界への真の出発としての旅というこの二つのレベルにおいてのウルフによる旅行表象を明らかにすることを目的としている。また、この作品に関する先行研究では、ほとんど注目されていないスーザンとアーサーのカップルにも焦点をあて、その二人の婚約が成立した小旅行とレイチェルとテレンスの愛が成立する小旅行を比較し、それぞれの旅の質の違いが、レイチェルの死で終わる本作品の結末と深く結びついているということを示したい。

### 2. トールキンの『サー・ガウェインと緑の騎士』に読みとるファンタジー

九州大学大学院博士後期課程 島居佳江

今日、ファンタジーという言葉は巷にあふれている。多種多様のファンタジー定義が流通している中、トールキンの講演をもとに、「ファンタジー」を考察し、1400年頃に書かれたと言われている『サー・ガウェインと緑の騎士』の中にファンタジー的要素を探ることが本論の目的である。

『サー・ガウェインと緑の騎士』は、中英語の韻文で書かれた作品のトールキンによる現代語訳に、彼自身の作品解説を付け、トールキンの死後、三男クリストファーによって発刊されたものである。

ファンタジーの効能について、トールキンは、回復、逃亡、慰めを挙げている。「妖精物語の素晴らしい例」とトールキンのいう『サー・ガウェインと緑の騎士』に、これらファンタジーの本質を見出し、本論でファンタジーの輪郭を更に明確に描き出す試みは、これまで児童向けと見なされることの多かったファンタジー文学に、より多様な領域を提供することができると考える。

司会 九州大学教授 谷口 秀子

## 3. queer な感覚とアイデンティティの揺らぎ——ルイス・キャロルの現実——

北九州市立大学大学院博士前期課程 堀 秀暢

本発表の目的は、ルイス・キャロルの著書『不思議の国のアリス』及び、『鏡の国のアリス』における事象を、現代における queer 理論を用いて論証することである。queer という単語は元々、「妙な、奇妙な」といった意味をもつが、現代においてはそれが転じて、同性愛者を指す単語となっている。同性愛者は、社会において常に自身のアイデンティティの危機にさらされている。男性でも女性でもないいわば、中間に位置する存在であるために、社会の持つコードとの「ずれ」が存在しているためである。このようなアイデンティティに関する問題は、キャロルの作品の中においてもたびたび見られる。主人公アリスに生じる肉体の変化や、不思議な世界で起こる現象のために彼女に「ずれ」が生じていく。このような体験により、アリスのアイデンティティは次第に崩壊していくのだ。このような、アリスに生じるアイデンティティの危機を queer な感覚として捉え、論証していきたい。

## 4. 狼に変身する赤ずきん——Tanith Lee の“Wolfland”における女性像——

福岡工業大学助教 原田 寛子

イギリス女性作家 Tanith Lee の短編集 *Red as Blood* における、グリム童話の「赤ずきん」をもとにした書き直し作品である“Wolfland”を取り上げ、女性の視点からこの物語がどのように書き換えられているかを論じる。本発表では、まず「赤ずきん」の物語において口承伝統からグリム童話に至るまでの解釈の変遷を概観し、「赤ずきん」において女性の役割が伝統的な役割分担に固定されていることを問題点として提示する。そして、“Wolfland”においてそれらの問題点がどのように扱われているかを考察する。具体的には、おばあさんや赤ずきんが自我をもった女性として描かれていること、そして、伝統的なおとぎ話では自らを食べる狼に変身するということによって、女性を巡る強者と弱者の立場が転覆していることに注目する。また、「女性と変身」、「女性同士のつながり」という点にも着目し、犠牲になり救出される受け身の役割から自らを守る術を備えた女性として、伝統的なおとぎ話とは違った女性像を提示していることを検証する。

## 第 3 室 (2E405 番教室)

司会 鹿児島大学教授 竹内 勝徳

## 1. 『書記バートルビー』における語り手の苦悩——語りへのアプローチ——

九州大学大学院修士課程 宮地 悠

メルヴィルの短編小説『書記バートルビー——ウォール街の物語』(1853)は、一人称の語り手の描く曖昧なバートルビー像をめぐる、これまで多様な解釈をもって読み解かれてきた。その曖昧さの鍵を握る語り手の分析はバートルビー理解において不可欠であると言えるが、先行研究においては、彼自身の言葉から読み取られる人格的特性から、語り手としての信頼性の低さが強調されてきた。しかし一人称の語り手が宿命的に少なからず抱える作中人物としての「信頼のできなさ」を考慮すると、『バートルビー』においても、語り手の人格を含む、語られる「物語内容」の理解に加え、物語言説とその構造の分析は、語り手の受ける制約に囚われない作品理解を可能

にするとと思われる。本発表では、彼の単純かつ常識的と見える一面的な性格の裏側に潜む語り手としての苦悩を、語りの力点移動やパースペクティブの変化といったテキストの構造から読み取れることを示しつつ、曖昧な物語『バートルビー』を読み解きたい。

司会 福岡大学教授 大 島 由起子

## 2. 内なる荒野へ——*A Mercy*における自由への旅路——

九州大学大学院博士後期課程 吉 田 希 依

Toni Morrison の第九作 *A Mercy* (2008) は、建国以前の無法地帯アメリカが舞台であり、入植者、支配者としての男と、自然そのものであり被支配者である女、の対立を軸に据えた作品である。奴隷少女 Florence は、母による拒絶、村人たちによる追放という二度の挫折を経験し、三度目の挫折となる恋人 blacksmith の攻撃から自らの内なる闇に存在する小鳥を守るために、彼をハンマーで殴り倒して荒野に還る。この衝撃的な最後は、例えば *Beloved* に描かれるような、他者との絆を通じての再生のあり方とは、一見正反対のように思われる。

本発表では、*A Mercy* における Florence の飛翔を支配的価値観の転覆という観点から分析することで、Morrison 作品における野生の意味を再考することを目的とする。*Beloved* に描かれる Sethe の子殺しの場面は、Florence が恋人に殴りかかる場面と並べて読み直すことで、単なる奴隷制の悲劇とは別の解釈が可能となる。Sethe の挑戦が Florence へと引き継がれ、ヒロインたちが内なる荒野へと旅立ち自由を手にする過程を検証したい。

司会 北九州市立大学非常勤講師 大 塚 由美子

## 3. マーガレット・アトウッド『またの名をグレイス』

——犠牲者の立場を乗り越えていく希望を掲げる——

長崎大学准教授 松 田 雅 子

マーガレット・アトウッドの *Alias Grace* (1996) は、カナダで 1843 年に実際に起こった殺人事件取材して書かれた小説である。地主キニアとその女中頭で愛人のナンシーが殺害された事件で、使用人のマクダーモットと女中のグレイス・マークスが犯人として逮捕され、死刑の宣告を受けた。

若く美しいグレイスが、殺人を扇動した妖婦であるという見方と、うら若い乙女が脅されて凶悪な犯罪に巻き込まれたという見方が対立した。この作品で、アトウッドはグレイスの視点から歴史記述的メタフィクションを創作している。

精神科医のサイモンがグレイスに面接し、移民として、労働者としての過去の物語が明らかにされる。結局、グレイスの記憶を取り戻すために催眠術が施される。中絶で亡くなった先輩のメアリーがグレイスに憑依し、自分が彼女の肉体を借りて殺人を犯したので、グレイスに罪はないと断言する。このようなオープンエンドのプロットについて、読みの可能性を考察する。

## 第4室 (2E406 番教室)

司会 久留米大学教授 河内 千栄子

### 1. シャドーイングに見る日本語話者の英語発音考察

福岡女学院大学講師 城戸 真由美

本発表は、日本語話者である大学1年生約90名を対象とする英語発音の音声学的分析である。チエル株式会社によるフルデジタルCALLシステム CaLabo EX の学習ツール「ムービーテレコ」を利用して70語程度の手稿のシャドーイングを行う。学期の序盤と終盤の2度録音を行い、データを回収する。初回時に見られる被験者の発音上の傾向として、以下の例が挙げられる。文のイントネーションに関して高低変化が少ない、内容語と機能語をほぼ同じ強さで読む、2音節以上の語において強勢の付け方が弱い、母音が簡略化される、子音の呼気が弱い、子音群に母音を加える。2ヶ月のトレーニングを経て再度録音したものと比較し、母音・子音・イントネーションにおいて、大きく改善された点およびあまり改善されなかった点を選び分けて分析・考察を行い、効果的なトレーニング法、CALLが果たす役割、授業で指導する際の注意点について議論する。

司会 福岡工業大学教授 古川 武史

### 2. 英語条件節からの抜き取りに関する統語分析

九州大学大学院修士課程 吉村 理一

IF-clause は生起位置が定まっておらず、文頭、文末、文中のどの位置にも表出することが可能である。その位置により、統語的にも意味的にも違いが生じる。

特に興味深いことに、Taylor (2007) によると、Sentence-final IF-clause からの抜き取りに関して島の効果が表れる (\*Aspects, Michelle will understand linguistics better if she reads e.)。しかし Sentence-initial IF-clause からの抜き取りは容認度が上がる (Aspects, if Michelle reads e, she will understand linguistics better.)。

本発表では、Rizzi (1997) の精緻化された CP 構造に基づき、文末と文頭の IF-clause の基底位置の違いと、抜き取り要素の CP 領域内の着地点を考察することによって、両者の違いが原理的に説明されることを論じる。

### 3. 遊離数量詞について

九州大学大学院修士課程 溝江 恵美子

数量詞とその修飾要素が離れて生起する遊離数量詞の現象に対する、Sportiche (1988) の残留分析は、非対格構文や受身構文において、名詞句の元位置に数量詞が残留できないという事実を説明できない。そこで Bošković (2004) は、“Quantifiers cannot be floated in  $\theta$ -positions.” と一般化し説明した。

この一般化は数量詞が  $\theta$  位置に遊離しているにも関わらず非文になっている例には適用できず、別の観点からの分析が必要である。

- (1) a. \*These professors, Taylor will have all met before the end of term.
- b. \*Which professors will Taylor have all met before the end of term? (Bobaljik 2001)

そこで本発表では、FQの生起位置には、ある種の束縛条件が関わっており、syntaxの派生の中で認可されると仮定する事で、同一フェーズ内での派生的な関連付けを提案する。

## 特別講演（1号館 S201 ホール）

演題 英語の場所句倒置構文と There 構文

講師 学習院大学文学部教授 高見 健一（たかみ けんいち）

### 講師プロフィール

1952年 兵庫県生まれ  
 1979年 大阪教育大学大学院修士課程修了  
 1990年 文学博士（東京都立大学）  
 1988 - 1989年、1991 - 1992年 ハーバード大学言語学科客員研究員  
 2003 - 2004年 ハーバード大学イエンチェン研究所共同研究員  
 1982 - 1985年 静岡大学講師  
 1985 - 1994年 同助教授  
 1994 - 2003年 東京都立大学助教授  
 2003 - 2005年 同教授  
 現在 学習院大学文学部教授

### 主な著書

1. *Preposition Stranding*. Mouton de Gruyter, 1992. (市河賞受賞)
2. *Grammar and Discourse Principles*. University of Chicago Press, 1993. (久野暲氏と共著)
3. 『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版、1995.
4. 『機能的統語論』くろしお出版、1997.
5. 『談話と情報構造』研究社出版、1998. (神尾昭雄氏と共著)
6. 『日英語の機能的構文分析』鳳書房、2001.
7. 『日英語の自動詞構文』研究社、2002. (久野暲氏と共著)
8. *Quantifier Scope*. Kurosio Publishers, 2002. (久野暲氏と共著)
9. *Functional Constraints in Grammar*. John Benjamins, 2004. (久野暲氏と共著)
10. 『日本語機能的構文研究』大修館書店、2006. (久野暲氏と共著)
11. 『英語の構文とその意味』開拓社、2007. (久野暲氏と共著)
12. 『受身と使役—その意味規則を探る—』開拓社、2011.
13. “Remarks on Negative Islands,” *Linguistic Inquiry* 28: 553-576. 1997. (久野暲氏と共著)
14. “Quantifier Scope in English, Chinese, and Japanese,” *Language* 75: 63-111. 1999. (久野暲氏、Yuru Wu氏と共著)
15. “A Semantic Constraint on the Benefactive Double Object Construction,” *English Linguistics* 20:1, 197-224. 2003. 日本英語学会 .

